



うちのダンナはナイジェリアン

Vol.1

ナイジェリアンの嫁が綴る
お笑い国際結婚噺

Kana

わたしのダンナはナイジェリアン

私の夫はナイジェリア人である。

ナイジェリアというのはサッカーと元祖振り込め詐欺で有名なアフリカの大国なのだが、平成25年現在、日本国民にもっとも通りが良いのは、「ボビー・オロゴンの祖国」という説明だろう。実際、彼が彗星のごとく芸能界にデビューして以来、ナイジェリアについて人に説明するのが格段に楽になった。彼が世に出る以前、日本人の実に8割はナイジェリアがどの大陸にあるのかわからなかった（多分）。

「ナイジェリア？それって南米の国だっけ？」という質問を、私は何度受けてきたことか。その度に親善大使さながらナイジェリアの説明を繰り返すことに、いいかげんうんざりしていたのである。

そうした苦勞を、今はボビーが一身に背負ってくれている。

そういう意味では、ボビーが在日ナイジェリア人社会に与えた影響は非常に大きなものであるといわざるをえない。われらナイジェリア人の嫁連合（そんなものはないが）は、彼の打ち立てた功績をたたえ、毎年の彼のデビュー記念日に盛大な祭りを開催するべきかもしれない。

まあ、そんなことはどうでもいい。

ともあれ私の夫はナイジェリア人で、私はそのナイジェリア人亭主と13年の月日とともに過ごしてきた。

厳密にいうとそのうちの2年くらいは夫を家から追い出していたため正味11年というところだが、なにせよ10年の長きにわたってナイジェリア人の嫁でありつづけてきたという事実到我ながら驚く今日この頃である。

ところで、人間はどんな環境にも柔軟に適應する生き物だといわれるが、「ナイジェリア人の嫁」という一般的には特異なポジションも、10年やってる本人にとってはごくあたりまえの日常と化してしまっている。

亭主の肌がこげ茶色なのも日常なら、息子たちの陰茎に包皮がないのもまた日常。シェーバーでは到底それない手ごわいヒゲを脱毛ムースで溶かすため、半裸の亭主が顔を真っ白にして居間で相撲観戦をしているのも、我が家ではごく当たり前の光景だ。

そんな我が家の当たり前、でもおそらく世間一般の皆様にとっては全然当たり前ではない出来事をつらつらと語ってみようと思う。

廃墟ビルへようこそ！

何を隠そう、我が家はナイジェリアにビルを一棟所有している。

この話をすると、たいていの場合は「えーっ、ビル!? すご〜い！」という賞賛と羨望とがいりまじった反応を受けるのだが、ビルにも色々あるわけで、今日はそのことについて書いてみたい。

ビルを持っているのは本当だ。夫の出身地である某地方の目抜き通りに面した300坪ほどの土地に建つ6階建てのビルで、グランドフロアが事業用オフィス、1階から上が賃貸用のフラットで、1フロアーに2つずつのフラットを配した設計である。豪華というほどではないが、まあ、それなりの規模だといえるだろう。

ただし、この話には続きがある。確かにビルはあるのだが、実は内装がまったくされていない。なぜかという、ガラを建てたところでなけなしの資金がつきてしまったからだ。

私の夫は真面目で頑張り屋のいい人なのだが、大変残念なことに計画性というやつがゼロである。この時も、どうやら建設業者の甘言に乗せられて気が大きくなり、予定より大きな建物を建ててしまったらしい。

「せっかく目抜き通りの土地なのだから、大きな建物にしておいた方がいいですよ」
...とでも言われたのであろうか。まあ、確かにそれはそうだけど、いくら大きなビルを建てたところで、完成させねば意味がないではないか。

そもそもこのビルの建設は、出資者である私への相談もなく夫が勝手にやってしまったことであつた。私が貸した数百万の事業資金を持ってナイジェリアに里帰りしたっきり、半年ほど帰ってこないなと思っていたら、ある日突然、

「ビル建てちゃった」
という連絡が来た。寝耳に水どころの話ではない。

もちろん私は激怒した。激怒のあまり、帰国した夫を家には迎え入れず、2年ほど別居していたほどである。そのせいで私は夫の一族からすっかり嫌われ者になってしまったのだが、その詳細はまた別の機会に書こう。

そんなわけで我が家は確かにビルを持っているのだが、打ちっぱなしといえは聞こえはいいむき出しのコンクリートの建物だけが、目抜き通りに空しく放置されている状態である。夫には内緒だが、私はこっそりそのビルのことを「廃墟ビル」と呼んでいる。

私には、故郷に錦を飾るべく立派なビルを建てたかった夫の気持ちが分かる。

なまじっか目抜き通りに土地を買わせた私もいけなかったのかもしれないが、その道沿いが繁栄してくるにつれ、何も建てずに放置していることが辛くなってきたのも理解できる。一族の結びつきが強いナイジェリアにあって、身内からの期待やプレッシャーもあったことだろう。

それは分かる。分かるんだけど、だったらなんできちんと完成にまで漕ぎ着けんのか。

6階のところをたとえば3階にして残りを内装費に回していれば、とりあえずビルは完成して賃貸に出すことができたはずだ。その賃貸費を貯めて増設費用に回し、後日6階にでも10階にでも増やせばよかったのではないかと。まあ、やってしまったことをいまさらあれこれ言っても仕方がないのだが。

この「黙ってビル建てちゃった騒動」により、ただでさえ壊れかけていた我々夫婦の信頼関係は一気に崩壊した。それ以来私は夫に対して一切の資金援助をしていないし、あのビルがその後どうなったのかも詳しくは聞いていない。聞いたらまた腹がたつので、敢えて耳をふさいでいるのである。

赤字垂れ流しの事業をたたんでサラリーマンに戻った夫が、少ない月給から建設費用を捻出できているとは思えないので、おそらくビルはあの頃のまま廃墟であり続けているのだろう。

廃墟マニアの皆さん、ナイジェリアへ行かれる際にはぜひ我が家のビルをご訪問下さいませ。

神に祈りを

私の夫は、時折、薄暗がりでうずくまっていることがある。

どういううずくまり方かというと、床にひざをついて背中を丸めた、ヨガでいうところの胎児のポーズ。聞くところによればイボ痔の手術はこのような姿勢で行われるらしいが、もちろん彼はその手の手術の予行練習をしているわけではない。

夫が薄暗がりでうずくまっている時、それは神に祈りを捧げている時だ。

意外に思われるかもしれないが、夫は敬虔なクリスチャンなのである。

何か悩みを抱えている時、あるいはすばらしい出来事に感謝したい時、彼は跪いて神に祈る。妻の金で勝手に母国にビルを建てちゃうような男ではあるが、全能なる神には従順なのだ。

さらに意外な話をすると、なんとこの私もクリスチャンだ。

もともとはプロテスタントの一教派であるバプテスト教会に属していたが、夫と結婚するあたってカトリックに改宗した。改宗の際には洗礼なども受けたわけだが、その時にもらった洗礼名があらうことか「ローザ」。我ながら何がローザかというカンジではあるが、もらってしまったものは仕方がない。

ついでにいえば、三人の息子も全員クリスチャンということになっている。夫がどうしてもするということで、生まれてすぐ洗礼を受けさせた。その後ほとんど教会に連れて行っていない上、聖書もまともに読ませたことがないので、本人たちには自分がクリスチャンだなどという自覚すらないだろう。

夫はどうか知らないが、私は個人的にそれでいいと思っている。赤ん坊の時の洗礼なんてのは、突き詰めれば親のエゴだと思うのだ。本当の宗教は、いずれ大人になった時に彼らが自分で選べば良い。

それでも、我が家では年に二回だけ一家揃って神に祈ることにしている。

二回というのはクリスマスと新年で、この時ばかりは崩壊寸前の家族が一同に会してお祈りをする。名ばかりのあるじ（夫のことだ）が祈りを捧げ、妻と子供たちは神妙な顔で目を閉じてそれを聞くのである。

ちなみに夫が捧げる祈りはだいたいパターンが決まっていて、まずは神への感謝を述べてから続けて願い事を並べていく。

この願い事が異様に多い。平穩、富、健康などといった通り一遍の願いを告げたあと、母国の誰々がどうなりますようにとか、仕事がこうなりますようにとか、いやにブレイクダウンされた願望がズラリと並ぶ。祈りというのは得てしてそういうものかもしれないが、いざ声に出して言わ

れるとちょっと引く。

我が家のメンバーは夫以外はみな不心得なクリスチャンばかりであるから、祈りが長引くにつれて態度が悪くなってゆく。夫が並べる願い事が10個を超えた辺りで、まずは長男が「長え…」などつつぶやく。

それを聞いた三男が「ぶふっ」と吹き出し、兄弟の仲では比較的真面目な次男が最後に「うひゃ」というような声を上げる。私は一応母親として、

「コレ、笑うんじゃありません！」

などと殊勝なことを言ってみるのだが、残念なことにその声が笑っている。

そんな不心得な家族を夫がたしなめ、最後に全員で「アーメン」を唱和するのも、いまとなつては割と貴重なわが家の家族の風景なのである。

国籍詐称の甘いワナ

私の夫はナイジェリア人だが、出会った当初はアメリカ人だった。

といっても、アメリカからナイジェリアに移民して国籍が変わったというような話ではない。単に夫が国籍を偽っていただけである。要するに当時の彼は「オレオレアメリカン」だったわけで、その主な理由は、端的に言えば「そのほうがナンパの成功率が高いから」というトホホなものであった。

この十年で、日本におけるアフリカの認知度は飛躍的に高まった。その陰にわれらがボビー（しつこいようだが、別にファンではない）の涙ぐましい努力があったことは想像に難くないが、まあ、その話はおいといて、今、言いたいのは当時の日本人が現在とは比べ物にならないくらいアフリカを知らなかったということだ。

今、のび太の机の引き出しから10年前の日本にトリップして道行く日本人に「アフリカから連想される言葉」を三つ挙げさせたら、おそらく十人中八人は「サバンナ、難民、サンコンさん」と答えるはずだ。知らんけど。

そんな中、これから女の子を引っ掛けてあわよくばチョメチョメしようとして企んでいるまさにその時、標的の脳裏にサバンナやオスマン・サンコンのイメージを植えつけたい男がどこにしようか、という話である。

こうした国籍詐称は、何も私の夫の専売特許だったわけではない。当時、日本全国の盛り場において頻発していた現象で、私が運営していた国際結婚関係のコミュニティサイトでも、しばしば問題にされていた。

曰く、国籍という重要なものを偽るのは重大な裏切りである、愛国心の欠如である、欺瞞である、モラルに欠ける、詐欺同然の行為である、エトセトラ、エトセトラ。

当時は私も若かったので、そうした議論に参加してあれこれと意見を出した覚えがある。自分がどういう立場で発言していたのかさっぱり覚えていないのだが、あれから十数年の時を経て、今、抱いている率直な意見は、一言で言えば「まあ、どうでもええやんけ」である。

裏切りっちゃ裏切りだし、愛国心欠如といわれれば、まあ、それもそうかもしれないが、あえて身も蓋もない言い方をすれば、要は股間に血の上った男が後先かえりみずに吹いたホラである。コンパの席で勢いあまって慶応生だと名乗ってしまった日大の学生と、本質的には同じようなものなんじゃないかと思うわけだ。

「男性の下半身には人格がない」とは良く言われるが、そんな状態をついた幼稚なホラを愛国心の問題にまで発展させてどうしますか。

夫がかつて一時的にアメリカ人であったことや、そそっかしい妻が結婚式の招待状にアメリカ国

旗を描き、あわてた夫が、

「ゴメン、それナイジェリア国旗に変えて...」

とすまなそうにカミングアウトしたことなどは、我が家ではほのぼのとした笑い話として、時折茶の間をにぎわせている。

私に聞かないで

夫がナイジェリア人だということで、私はしばしば他人からナイジェリアについての質問を受ける。

ここではっきりさせておくと、私はナイジェリアのことをたいして知らない。ナイジェリア人の嫁を13年もやっていながらなんたることかと言われそうだが、そんなことをいわれても、知らないものは知らないのだから仕方がない。

そもそも私は、アフリカについてさほど強い関心を抱いていない。というか、そもそも自分の母国である日本のこともあまり知らない。

そりゃ40年この国に住んでいるのだから、首都が東京で主食がコメくらいのことは知っているが、都道府県の総数、県庁所在地、主要産業あたりになると怪しくなってくる。

そのへんの記憶は高校受験の前にしこたま頭に詰め込んだので、多分脳のどこかに入っているはずだ。入っているはずだが、もう出てこない。使わないのにとりあえずしまいこんでおいたビンのフタみたいなもので、何かの拍子に出てこない限りは、おそらく思い出すこともないだろう。

要するに私は、その手のことにはてんで関心がないのである。だから、ナイジェリア人の嫁を15年もやり、ナイジェリア国籍を持つ3人の息子を育てているにもかかわらず、ナイジェリアについてはたいして知識を有していないのである。

そこへ輪をかけてイタズラ者の夫がろくでもないホラを吹き込むものだから、事態はさらにややこしくなる。

いつだったか、夫がいつになくまじめな顔で、

「ナイジェリアでは、日本のスズメみたいな感覚でダチョウが公道を闊歩している」と私に話してくれたことがあった。

ダチョウは道端に巣を作り、そこに大きな卵を産む。その卵が良い食材になるのでナイジェリアの子供はよくそれを盗むのだが、盗むところをおやダチョウに見つかるのもすごい剣幕でどこまでも追いかけてくる。

――というような話を、迫真の身振り手振りを浴えてまことしやかに語ったのである。

当時まだ純真な20代であった私は、その話にいたく感心し、面白おかしくエッセイ化して当時運営していたホームページにいそいそと載せた。

その後しばらくして、夫の告白によりその話が真っ赤なホラだったことが判明し、大慌てでホームページにお詫びの文章を載せたのが、まるで昨日のこのように思い出される。

ホラといえば、「ラゴス（当時ナイジェリアの首都だった）はニューヨークにそっくりだ」という世紀の大ボラを吹かれたこともあった。結婚して4年目、3歳になる長男を連れてナイジェリア

を訪れようとしていた時のことである。

夫の話がホラであったことはラゴスの空港を出てもものの3分ほどで明らかになったが、「これのどこがニューヨークか」と詰め寄る私に、夫は「だってそうでも言わなきゃ、君、ついてこなかったでしょ」としれっと答えた。まあ、おっしゃるとおりではある。

そういうわけで、私の持つナイジェリア情報はたいへん怪しいものだ。

こんなタイトルの本を出してはいるが、本を通じてナイジェリアの文化を日本に広めようなどという殊勝な心構えはさらさらなく、むしろ、読者の皆さんにおかしなナイジェリア観を根付かせてしまったらどうしよう、と人知れず小さな胸を痛めている次第である。

ニホンゴハナセマスカ？

「外国語を身につけるには、その国に何年か滞在するのが一番手っ取り早い」というセリフをよく聞かすが、私はその説にはやや懐疑的である。

ナイジェリア人である私の夫はハタチの時に来日し、そのままズルズルと日本に居座って、今年45歳になる。

人生の半分以上をここ日本の地で過ごしてきたわけ事になるが、そんな彼の日本語は、言っちゃ悪いがいまだにカタコトだ。

いや、カタコトという評価は少々厳しすぎるかもしれない。ヒアリングはほぼ完璧だし、「やっとかめ」や「おみゃーさん」などのマニアックな方言も使いこなす。また、会話のジャンルによっては外国人とは思えないほど流暢な日本語を自在に操ることもある。

以前、なんだったか用事があった夫の勤務先に電話を入れたら、

「ヘイッ、●●興業っ！」

と妙に威勢のいいオッチャンが出た。受話器越しの声に忙しそうなオーラが色濃く漂っているのを感じ、

「お仕事中にすみません、〇〇ですけどうちの夫はおりますでしょうか？」

と恐縮してたずねたところ、

「あっ、ワタシワタシ～」

という返事が返ってきて、「アンタかいな！」と驚いたことがあった。自分の亭主にあんな魚屋の大將みたいな電話の受け答えができるということを、私はその時初めて知ったのである。

そういった例外はあるものの、全般的に冷静な評価を下せば、夫の日本語会話能力は小学校2年生の三男を著しく下回っているといわざるを得ない。読み書きの能力に至っては、おそらく4歳の姪と同レベルで、漢字は覚える気すらないようだ。

20年も日本で暮らしてきたのに、ひらがなの読み書きもおぼつかない。その生々しい事例を日々目の当たりしているからこそ、「外国に住みさえすれば言語が身につく」という意見を鵜呑みにする気にはなれないのである。

――まあ、単にうちの夫日本語習得にかける意欲の問題なのかもしれないが。

ところで、そんな夫が最近ローマ字でメールを送ってくるようになった。

かつて我々夫婦のメールはすべて英語で交わされていたのだが、どうした風の吹き回しだろう。中学1年生の息子が、

「日本人の若いカノジョが出来たに違いない...」

とつぶやいていたが、いわれてみれば時折まざるキラキラした絵文字など怪しさ満載ではある。

ひょっとして日本語カタコトなのは老妻の前でだけ見せる一種のポーズで、よそでは我らがボビー・オロゴン（別にファンではないが）顔負けの流暢な日本語を操っているのだろうか。

珍獣か！

自分で言うのもなんだけど、私は平凡な女である。中身は少々風変わりかもしれないけれど、外見は至って普通。中肉中背、美人でもなければさほど個性的でもなく、敢えてたとえるなら浮世絵かコケシに酷似した顔。強いて言うならこの年代にしては乳は大きい方だと思うが、40過ぎて多少乳が出かかったところで誰が目を留めるのかという話である。

そういうわけで、私が一人で歩いている、周囲の注目を浴びることはあまりない。あまりというか、滅多にない。一般のご家庭のお母ちゃんが歩いている、という以外の感想を見る人に与えていないであろうことを、私は自信を持って断言できる。

しかし、これが家族を伴う外出となれば話は別だ。

夫や息子と連れだって道を歩く時、私は一気に道行く人々の注目の的となる。コンペでプレゼンをする時だってこれほどまでには注目されないのでは、と思うくらいに見つめられまくる。人から見つめられる事が好きではない私にとって、これはあまり嬉しい事ではないが、人の口に戸は立てられず、人の目に幕は下ろせないため、やむを得ず黙って見られているのである。

こういう事にも「慣れ」というのがあるようで、十数年見られ続けた結果、最近ようやく人の視線があまり気にならなくなってきた。しかし、新婚の頃には行く先々でジロジロと不躰に見つめられることが大変気になったものであった。

いつだったか、まだ幼い長男を連れて某動物園へ行った際、

「ホラ、ゴリラさんだよ。赤ちゃんもいるねえ」

とゴリラ山を指さす我々の後ろで、「あっ、黒人！子供もいる～」とはしゃいでいる一軍がいた。

「君らはここへゴリラを見に来たのか、私たちを見に来たのか！」

と振り向いて一喝したいところであったが、それも大人げなからうということで、なんとかこらえてその場を去った。

日本もすっかり国際化し、いわゆる国際結婚も随分増えたが、日本人とアフリカンのカップルはまださほど多くはない。特に、地方に行くほどその数は減るので、珍しがられるのも栓ない事ではあると思う。

とはいえ、我々も一応普通の人間なので、さながら珍獣を見つけたようにはしゃがれてしまうと、戸惑いを感じずにはいられない。

アフリカの水を飲んだ者

アフリカには「アフリカの水を飲んだ者は再びアフリカへ帰る」という諺があるそうだが、こと私に限っていえば、これは全く当てはまらない。

私はかつて一度だけナイジェリアを訪れ、その際にしこたま水を飲みまくったが、できることなら今後は二度と彼の地を訪れることなく静かに人生を終えたく思っている。

私がナイジェリアを訪れたのは、今を去ること十余年、現在高校一年生の長男がまだトーマスとアンパンマンに首ったけで、次男が発生後8ヶ月の胎児として私の腹に収まっていた頃のことである。

エジプト航空のヨーロッパ回りで日付変更線を遡り、体感時間にして30時間を越える長い長い空の旅。トランジットは何度かあったが、エコノミーシートの狭苦しい座席にいやんなるほど座っていた。

30時間飛行機に乗り続けるというのは、平時であってもおそらく結構ハードなものなのではないかと思う。そのハードな長旅に、私は下っ腹に5キロのコメ袋を結わえ付けたごとき身重の体で挑んだわけだ。

腰は痛いわ腹は張るわ、ふくらはぎなどは盛大に浮腫みまくって、ケツかと思まごうようなサイズになった。おまけに後ろの席のエジプト人の坊主が終始イスをガンガン蹴ってきて、うたたねすらもままならない。実に散々な旅であった。

そうしてようやくたどり着いたナイジェリアでは、もちろん楽しいこともたくさんあった。普通に日本で暮らしていたら一生見られなかったであろうようなものを見ることができたし、クジャクのゆで卵や羽虫の浮いたパームワイン、道端で新聞紙にのせて売っている牛の焼肉（スイヤ）など、珍しい食べ物を食することもできた。人々はみんなあつたかかつたし、部屋の壁にくっついていて白いヤモリも可愛かった。

1ヶ月強の滞在期間中、総じてそれほどいやな思いをしたというわけではない。それでも忌憚ないところを言わせてもらえば、

「一回行けばもういいや」

というのが私の偽らざるキモチである。

私は基本的にワガママなので、暑かったり寒かったり水が出なかったりといった不自由が我慢できない。一日に15分くらいしか電気が来ない当時のナイジェリアでの生活は、大げさなようだがほとんど苦行に等しかった。

加えて元来人付き合いが好きではないため、「人類みな兄弟」的なアフリカの風土が肌に合わない。寝てもさめても近くに誰かがいるナイジェリアでの生活は、私の精神を著しく消耗させた

。

更にクツをはいたままの暮らしにも、どうしてもなじむことができなかった。帰国して裸足で自室の床に寝転がった時には、あまりの嬉しさに涙が出たものだ。

誤解のないよう言っておくが、私は別にナイジェリアをあしざまにののしりたいわけではない。ナイジェリアにはナイジェリアのいいところが当然あるが、そのいいところを私は好きになることができなかった、要はそういう事である。やむにやまれぬ事情に押され、妊娠8ヶ月のみそらで渡航を余儀なくされた人間に「ナイジェリアの魅力を理解しろ」というのが、土台無茶な話だったのだと自分では思っている。

異文化に対して寛容で、かつ人間好きなイイ人は、きっとアフリカを好きになるに違いない。アフリカに魅了されて自ら彼の地へ足を運んだそうした人は、諺どおりまたアフリカへ帰りたくなるのだろう。好きな人にはたまらないであろう魅力が、たしかにアフリカにはありそうだ。

※追記：

数年前に単身で一次帰国した夫によれば、昨今のナイジェリアではインフラ上の不備はほぼ解消され、かつてのような不便な思いをすることはほとんどないという。しかし、ラゴスがニューヨークにそっくりだと言いつつホラ吹き男爵の言葉を鵜呑みにするほど、私はウブな女ではない。うまうまと騙されて渡航した結果、アフリカ嫌いに拍車をかけて帰国するようなことになるのはいやなので、やっぱり二度と訪れずにおこう。

イボのひと

知らない人も多いと思うが、ナイジェリアの正式な国名は「ナイジェリア連邦共和国」という。連邦制のナイジェリアには36の州があり、そこにナント250を超える部族が住んでいるらしい。250という数字は、先ほどWikipediaで調べて始めて知った。前々からやけに部族の多い国だという印象は抱いていたが、250もあったとは驚きである。

そんな中、私の夫が「イモ州出身・イボ族の男」であるというのは、なかなか興味深い事実だと思う。

もちろん、イモもイボもナイジェリアでは何の変哲もない固有名詞である。それは分かっているのだが、私は生粋の日本人なのだ。私の脳内IMEにかかれば、どうしたって「イモ」は「芋」、イボは「疣」に変換されてしまう。36州×250部族で理論上9000通りもの組み合わせが考えられる中、よりによって「芋と疣」がバンドルされて私の元に届けられた。これはもう、人知を超えた偉大なる存在からの「ネタにせよ」というメッセージとしか思えない。

もっとも、イボは英語ではIgboと書き、厳密に言えばイとボの間に「グ」の音が入る。つまり、イボ、イボと呼んでいるものの、正確には「イグボ族」が正しい部族名なのである。

この「グ」の音は日本語にはないちょっと独特の発音で、言葉で説明するのは難しいのだが、私の知る中でもっとも近いのは「出かかったしゃっくりを途中でかみ殺す音」だ。

Igboを正しく発音するには、まず「イ」と発声してから間髪入れずしゃっくりをかみ殺し、そこから滑らかに流れるが如く「ボ」の音を出さねばならない。

残念ながら私はいまだに、この高度な技を習得できずにいる。

十年一昔とはいふけれど

今となってはカンブリア紀より昔の事に思えるが、結婚当初、私と夫は右に並ぶものの無い「ラブラブカップル」として知られていた。

ラブラブカップル、などという言葉が既に死語である訳だが、とにかく我らは朝から晩までイチヤイチャイチャイチャして過ごしていた。朝は目覚めのチュウで始まり、二人で手をつないで歯を磨き、行ってらっしゃいのチュウで亭主を送り出すと、15分後に携帯に「元気い？」という電話がかかってくる。

「15分前に元気だった女房がいきなり病気になるか阿呆！」

と今だったら怒鳴りつけるところだが、当時は私もそういうのを喜んで受けていたわけだ。互いのことを「ダーリン」「ホニー(honeyのこと。訛ってるから)」などと呼び合い、暇さえあればアイラブユーを連呼。夜は食後に手をつないで近所のビデオレンタル（DVDは確かなかった）までお散歩し、帰宅して浴びるように酒を飲みつつまたいちゃいちゃ。

――書いていて我ながらうんざりしてきたが、まあ、とにかく我々夫婦にもそういう時代があったのだ。

あれから実に14年。10年経てば子犬だって老犬になるし、一万円にトイチの利子をつけて複利で回せば、ちょっとした財産ができる年月でもある。それを思えば、かつてラブラブカップルであった我らがぱっさぱさに枯れ果ててしまったのも、まあ、自然の成り行きというやつだろう。

共働きで、かつ夫が夜勤がちであることも手伝って、我々夫婦が顔を合わせるのは、よくて週に二度である。それも、帰宅した夫と今まさに出勤しようとしている妻が玄関で鉢合わせ、

「おっ、久しぶり！元気？」

「最近どお、儲かってる？」

と、商工会議所で半年ぶりに顔を合わせた零細企業のオヤジみたいな挨拶をかわすのだ。

詮無いこととはいえ、時の流れというのはかくも切ないものである。

うちのダンナはナイジェリアン！

<http://p.booklog.jp/book/78693>

著者：Kana

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/marutora/profile>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/78693>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ